

Dr. Wagnerを訪ねて*

——ハンドテストの創始者から学んだこと——

佐々木裕子 静岡大学人文学部

Dr. Wagner (Edwin Eric Wagner, 1930年生まれ, 米国の心理学者) の名前を聞いて, 多くのロールシャッハ研究者が思い出すのは, 多重人格障害のロールシャッハ特徴を指摘したワグナー指標 (Wagner & Heise, 1974; Wagner, Allison, & Wagner, 1983; Wagner, 1992; Young, Wagner & Finn, 1994) のことではなかろうか。有名な多重人格障害に関するロールシャッハ研究は, 彼の重要な業績の一つではあるが, 今回私が Wagner 博士を訪ねた最大の目的は, 彼が考案した新しい投映法検査——ハンドテスト——を彼から直接学んでくるためであった。

私は, 2002年9月27日から30日の4日間, サウスキャロライナ州の Isle of Palms というリゾート地にある博士の邸宅を訪問し, 朝から晩まで博士とお話することができるという, 非常に貴重な時間を得たのである (にもかかわらず, 私は直前に妊娠してしまい, つわりによる体調不良で貴重な時間のいくらかを無駄に過ごしてしまったのであるが……)。博士を訪問するにあたり, 私が博士から最も聞きかかったのは, ハンドテスト誕生の歴史である。ロールシャッハ法のあの10枚の図版がどのように作られたのか, 我々は推測するしか術をもたないが, ハンドテストはまだその原作者から直接開発過程を聞くことができるのである。この貴重な機会を逃がすわけにはいかない。

ハンドテストは, 箕浦 (1970) によって日本に

紹介されてから, 犯罪心理・矯正教育分野において浸透したものの, マニュアル本の邦訳が刊行されなかったこともあって, 日本の臨床心理学分野では十分に普及しないままとなっていた検査法である。しかし, 吉川 (1988) の研究を期に1990年代にはいくつかの研究が見られるようになり, 2000年にはマニュアル本の翻訳が刊行された (山上訳, 2000)。既に米国では, 犯罪心理学分野をはじめ, 病院臨床, スクール・カウンセリング, 発達障害者施設など多岐にわたる分野で利用されており, 臨床的な有用性が実証されている心理検査法である。おそらく, 日本においても近い将来さまざまな臨床現場で用いられることになるであろう。その時, 日本の心理臨床家が, ハンドテスト誕生の逸話を耳にすることができるように, 博士からしっかりと興味深いエピソードを聞いて来なければ。私は妊娠の喜びも早々に博士宅に向かったのである。

到着したその日の晩, 私はさっそく博士にハンドテスト図版の作成過程について質問した。この検査の原典が最初に刊行されたのは1962年 (Wagner, 1962) であるが, 博士がこの検査の作成に着手したのは, そのわずか数年前, 1958-59年頃で彼がまだ30歳になる前だったそうである。当時アメリカでは, 心理検査法 (投映法) で実際の行動傾向を測定することができるかについての議論が盛んで, 博士はこれに答える意味で

「原型的な行動傾向」の測定に焦点を当てた投映法検査を考案することを思い立ったようである。博士によると, 既に手や顔の情報から情緒的な状態を判定することが可能なことを示したいいくつかの研究がなされており, これらの研究が手の絵を刺激にしようと思いついたきっかけになったとのことである。

ハンドテストの刺激図を作成するにあたり, 博士は Rorschach 法を念頭に刺激図は10枚で十分であること, また, TATの白紙カードをヒントに最後の1枚を白紙カードにすることを決めていたそうである。必要なのは9枚の「曖昧な」手の絵である。彼はなんと30分ほどで9枚の曖昧な手の絵を彼自身で描きあげたという。自分の手を見, それをイメージしながら, 「忠実に再現しないよう」に注意しながら描いたとのことである。ただ, なぜか博士自身気にもしていなかったことのようにあるが, 右手と左手の絵ができてしまった。カードVIとVIIの2枚だけ左手なのである。しかも, IIカードは野球による怪我で曲がってしまった博士の左手を描いたものであるにもかかわらず, ハンドテストのIIカードは右手である。実際, 今も博士の左手薬指は, まさに絵のとおりのに曲がっていて, 博士は「この手だ」と私に見せてくれた。この左手と右手の不思議な逆転について博士に問うたが, 博士自身「分からない」とのことであった。彼の口癖の “I'm an old crazy man” を繰り返して, “An old crazy man doesn't remember” と言われてしまった。どうも, 彼もまた彼の奥様の Carol も私が質問するまでIIカードが右手であるとは意識していなかったようである。博士が手の絵を描いている時, おふたりは既に結婚されていて, 奥様がいくつか手のポーズをとられたそうであるが, それがどのカードなのかなど, おふたりとも詳しいことは覚えていないようであった。奥様も臨床心理士で, おふたりは数多くの共同研究をされているのであるが, ハンドテスト誕生の瞬間からその共同研究は始まって

いたことになる。

ハンドテストの手の絵は, それ以外のポーズの中から選ばれたものではなく, 最初から博士はこの9枚の手の絵しか描かなかったそうである。また, これらは博士が最初に描いた後, 一切修正や加筆がされることはなかった。ロールシャッハ法が何十枚という inkblot の中から選ばれ, さらに加筆もされたであろうと推測されている (中井, 1997) のと比べると, 驚くべきインスピレーションである。唯一IXカードだけ, ハンドテスト開発の共同研究者であり, Rorschach 法で有名な Piotrowski の助言で “より sexual” になるように上下が反対にされたとのことである。確かにIXカードは最も反応の難しいカードで, 上下を逆にした方が反応しやすくなるカードである。この絵をIXカードにした明確な理由は聞いていないが, 知覚分析と呼ばれるロールシャッハ法の Piotrowski 法では, 図版IXショックとして, 「求愛行為に関するアンビバレンスとして解釈され (略), 異性愛行為に対する急性の葛藤を示す」 (岡堂・矢吹, 1976, p.177) としていることを考えてのことだったのではなかろうか。また, カードIIIはIIカードによるショックから立ち直るための “recovery card” として配置され, カードVIはアグレッションが喚起されることを当然予測したものであった。しかし, ハンドテストの見事なカード継列 (佐々木, 1999) すべてを予測していたわけではなく, カードの順番は博士の直観によるところが大きいようである。どのようにして順番を決めたのか, また, どのカードを最初に描いたかについても質問したが, やはり覚えていないとのことであった。結局, ハンドテスト誕生の詳細なエピソードは分からないままであったが, 博士の左手との出会いは, ハンドテスト誕生の証を目の当たりにしたという実感を私に与えてくれた。

次に私が博士にお願いしたのは, 実際のハンドテスト・プロトコルの検討である。博士は書斎として使われている3階の屋根裏部屋 (attic) の

* 本文の一部は, 誠信書房2003年4月20日発行の「誠信レビュー」第82号に掲載されたものに加筆修正したものである。

物置いっぱいにあるケース資料の箱——おそらく1,000ケースは優に越えるであろう——の中から、いくつかのケースを選び出し、私のリクエストに応じてケース検討会を実施してくれた。まず、スコアリングの検討、それからケースについての概要を博士が読み上げ、各ケースの問題点や特徴などを話し合った。とりわけ、現在彼が関心を寄せている brain damaged patients のケースについては、ハンドテストの organic signs について博士の最新の知見を教わると同時に、どの反応にどのような形で脳損傷のサインが表れているかを実際のプロトコルを見ながら教わることができた。

また、博士は現在ペイン・クリニックの患者に関心をもたれており、“痛み”という非常に主観的な症状をどう評価するか、その難しさについて言及された。保険会社による医療保険が中心のアメリカでは、その痛みが“偽り”でないかどうか評価する必要もでてくるようである。医学的には痛みの原因は特定できなくとも、“古傷が痛む”といった現象は確かに了解可能である。そうした痛みの訴えが“偽り”である場合、それは心理検査上に表れるものなのであるだろうか？ 心理検査でそれを断定できるものではないであろうが、博士は興味深い事例を呈示して下さった。それは、長年背中を痛めて就職できずにいる男性のハンドテストであった。彼の反応は非常に無力なものばかりで、彼が自ら何かに取り組もうとしない状態にあることが示されていた。しかし、最後の白紙のXカードで彼は、“自分の最も好きな手” だとして、“ゴルフクラブを握っている手”を見たのである。このカードは、最後のカードであり白紙カードでもあることから、将来的な生活役割に対する期待や空想が投射されやすいとされている。長年痛みを抱え、生活にも支障をきたしている人間が、このような娯楽的な反応をこのカードに出せるものであるだろうか？ 治る見込みも、将来的な見通しもない状況で……。IXカードまで

の反応との対比を考えても、彼の痛みの訴えが非常に他者依存的なものであり、しかも楽観的なものであることが指摘されるプロトコルである。この結果から、彼の“痛み”の真偽を断定することは難しいであろうが、彼の訴えに対する彼の心理的な態度を推し量ることは可能であろう。

“偽り”といえば、博士の多重人格障害に関する研究にも共通したものがある。私がふと思いついて、日本のロールシャッハ研究者の間で博士の Wagner 指標が有名であることを告げると、博士は書庫の引き出しから、多重人格障害を偽った強姦殺人事件の犯人に関する論文を出して下さった (Allison, 1984; Orne et al., 1984など)。Ken と Billy と Steve という三つの人格をもった犯人の、Ken と Steve の二つの人格によって産出されたロールシャッハ・プロトコルを博士は検討し、Ken は多重人格障害ではなく、“a special kind of sociopath” もしくは、“a paranoid with a psychopathic overlay” と結論づけている。博士によると、二つのプロトコルの要素は非常に類似したもので、二つの異なる人格によって産出されたものではないということであった。Ken は“ジギル博士とハイド氏”といった多重人格に関する書物を読んでおり、そうした本からの知識によって多重人格を作り上げていたと博士は断言された。偶然にも、ちょうど私たちがこのケースについて話し合っている最中、博士は一つのEメールを受け取ったのであるが、何とそこには Ken が獄中で亡くなったことが記されていた。博士がコンピューターを見ながら、“He just died” と叫ばれたときには、私は一瞬誰が亡くなったのか分からなかった。

博士のロールシャッハ法に関する研究については、もう一つ紹介しておくべき重要なものがある。Logical Rorschach と命名された、思考障害もしくは認知の病理を評価するための新しいロールシャッハ・スコアリング・システムである (Wagner, 2001)。博士はロールシャッハにおけ



Wagner 博士、愛車のスポーツカーと。(2002年9月30日)

る思考障害—内閉的反応 Autistic responses—を評価する明確な定義やスコアリング・システムが確立されていないことを批判し、これをきちんと体系立てた簡便なスコアリング体系を提唱されたのである。私は、ハンドテストの新しい質的スコアを通してこのシステムについて知ったのであるが、博士は Logical Rorschach のスコアリング・システムを体系立てた後、これをハンドテストに適用してハンドテストの新しいスコアを提唱されたようである。ちなみに新しいハンドテストスコアには、Logical Rorschach で提唱されているスコアリング体系 (TETRAUT: 四つの Autism と称されている) の中の最初に提唱された三つのスコア群 (TRAUT; 三つの Autism, HYPO, RELER, HYPER) の基本概念が採用されており、ハンドテストに表れる内閉的思考を評価することができるようになってきている。Logical Rorschach については、私はまだ勉強不足のためここで十分に紹介することはできないが、概要を記すと、Rapaport の逸脱言語反応、Exner の包括的システムという Special Scores に関係するもので、どちらも思考障害を反映するとされ

る反応が十分に体系立てられることなく列挙されているのに対して、Logical Rorschach では、これらの反応を下位スコアをもつ四つのグループに分類することで、概念的な定義と統合を可能にしている。さらに、TETRAUT がスコアされなかった反応については PAS スコア得点をつけることで、形態使用の正確さを評価することが可能になっており (いわゆる形態水準評価の代用となる得点である)、TETRAUT と PAS スコアのスコアリングによってプロトコル全体の思考障害の程度を評価することが可能になるというものである。私もロールシャッハ法を学ぶのはしぐれとして、思考障害を評価するロールシャッハ指標には非常に興味をそそられるのであるが、何しろハンドテストと同じく—からすべて英文による理解を必要とするので、これに取り組むには更にまた時間が必要である。博士は、実施法も Rapaport の1カードずつ反応の後に質疑を行う方法を採用されているらしく、その方法のメリットとデメリットについて質問しようとしたが、「とにかく本を読め」と言われてしまい、今回の訪問では Logical Rorschach まで手は回らなかった。

この博士の新しいロールシャッハ・システムは、博士にとっては、ここ数年アメリカの臨床心理学関連の雑誌で繰り返されている Exner の包括的システムに対する批判とその反論に対する“新しい提案”としての意味が大きいようである。博士は、包括的システムのノルムが非常に信頼性の低いものであることを何度も批判され、これに対して Logical Rorschach は実証的であることを強調されていた。日本では、むしろ包括的システムは非常にデータ中心の実証性を追求したシステムとしての印象が強かったのであるが、博士は次々と包括的システムの指標 (Wsum6 や Six Special Indices Scores など) が有効ではないことを指摘した論文を出してこられ (Wood & Lilienfeld, 1999; Garb, 1999; Wood et al., 2001; Kalla et al., 2002 など)、経験的にも包括的システムのデータを信用することができずと厳しく批判された (ゴシップ・ネタではあるが、包括的システムのノルムとなっている700人のデータの200ケースが二重集計されているというのである)。私も以前から疑問に思っていた14反応より少ないプロトコルを包括システムでは採用しないことについて聞くと、それも博士としては批判的で、アメリカ人でも多くの人が14反応より少ない反応数のプロトコルになるそうである。私は、アメリカ人はやはりエネルギーで、日本人よりも反応数が多くなるのだろうと考えていたが、どうもそうではないらしい。実際、ハンドテストの総反応数の平均は、むしろ日本人集団の方が多いのである。それにしても、博士の包括システムに対する評価は随分辛く、ロールシャッハの各システム間の確執は、アメリカでは未だに健在だったのだと、Piotrowski 法をきちんと勉強していない私は内心ハラハラしていた。既に述べたように Piotrowski はハンドテストの共同開発者であり、ハンドテストの基本仮説は Piotrowski の考えをもとにしている。したがって、当然博士は Piotrowski のロールシャッハ・スコアリン

グ・システムを採用されているのである。が、博士は Klopfer 法も Beck 法も習得されたそうで、私が用いている片口式が Klopfer 法を基にしていることを知ると、Klopfer 法の原典 “The Rorschach Technique” が2冊あるからと1冊譲ってくださいました。アメリカの古本屋でもおそらく手に入れることができないであろうと思われる貴重な古書である。

この他にも、ハンドテスト・マニュアルの原本 (Wagner, 1962)、投射法解釈のための人格論として博士が提唱された構造分析理論の体系本 (Wagner & Wagner, 1981)、Panek 博士との共同研究の高齢者のハンドテストに関する研究書 (Panek & Wagner, 1985) などを頂いて帰ってきた。また、博士が持たれているハンドテストに関する論文にも目を通させてもらい、好きなだけコピーして帰ってよとのことで、かなりの時間を文献複写に費やさせていただいた。博士のハンドテスト・セミナーの講義ノートは、二度と手に入れることのできない貴重な資料である。私の帰りのスーツケースは、たくさんの本と文献資料とで一杯であった。

最後のセッションでは、既にEメールのやり取りで検討してもらっていた私のいくつかのケースについて、改めて博士からコメントをいただいた。博士は再度詳しく反応を検討して下さい、私の気づいていない各ケースの問題点について指摘された。そして、この訪問期間、博士が何度も私に忠告されたことを繰り返された。“Listen to what the test tells us”; ケース概要や精神科医の診断名、他の人の意見に惑わされず、しっかりとテスト反応そのものを読みとれと。さらに、“Don't interpret what you don't know. If you don't know, just stop it”; たとえ他の人にはこれが分かると言われようが、自分には分からないのであれば分からない、それで止めなさい。検査から自分分かる以上のことを言ってはいけないと。この両者を両立させるには、私にはまだまだ

多くの臨床経験が必要であることを痛感させられた4日間であった。

この4日間、博士は71歳という年齢を感じさせないエネルギーで私の興味と関心に応じて下さった。この博士の若々しさは、まさに外見どおりである。実は、博士とお会いする前に私がイメージしていた博士の印象は、“既に高齢の、ちょっと厳しい感じの、体の大きな先生”であった。複数の知人から知らされた博士についての情報を私は適当に再構成し、自分なりに“ワグナー博士=典型的な老学者”像を作り上げてしまっていた。空港まで私を迎えに来て下さった博士とお会いした際、あまりにもこの印象と違っていたため、しばらく博士だとは認識できなかった。事前にEメールで私の写真を送っておいたので、博士は空港の到着ゲートから出てくる私をすぐに認識され、ゲートを出た直後の私の前に、ぬくっと立ちふさがれた。私は、どちらかという筋肉質ながっしりとした大きな男性を前に、とても71歳の老学者とは思えず、きよんとしてしまった。が、他に私を知る人がいるわけもなく、間違いなく私を見ているこの男性が Wagner 博士以外あり得ない。恐る恐る“Dr. Wagner?”と語りかける私に、無表情に頷かれただけで、博士は握手もなくさっさと一緒に来られた奥様の Carol を紹介して下さい。どちらかという無愛想な迎え方ではあったが、博士はすぐに私のスーツケースを持って下さり、私に道を譲るなど、さり気ない気遣いを示して下さいました。博士のこうした優しさは、訪問期間中何度も感じる事ができ、一見おっかない博士の印象を随分和らげてくれた。

博士の若々しさの秘訣は、彼自身の説だとアルコールだそうで、とにかく博士も奥様もお酒は大好きなようである。特に博士はアルコールはすべて“OK”のようで、日本酒も普段から“Sushi”と一緒に召し上がっておられるとのことで、お土産に持参した原酒をその場でお猪口一杯一気に飲

み干された。夕食に連れて行って下さった日本食レストランでは、魚介類は何でも、お刺身もお好きなようで、熱燗の日本酒と一緒においしそうに平らげられていた。残念なことに妊娠のためお酒のお付き合いができなかったが、お猪口にお酌をしながら、博士に是非日本のお刺身と日本酒をごちそうしたいとしみじみ思った。考えてみると、博士は日本の居酒屋の雰囲気がいびつたり合いそうである。

もう一つ博士の好物ではないかと私が推測しているのが甘いものである。訪問期間中、始まったばかりのつわりで思うように食べることのできない私を、博士は何かと気遣って下さった。最後の晩、比較的調子の良かった私は、久しぶりにお皿をすべて空にすることができた。さらに珍しく少し物足りない感じまでしていた私に、博士は「Hiroko は何か甘いものが食べたいのだろう」とデザートを注文して下さいました。前の日、食欲のない私がアップルパイは食べられたことを博士はちゃんと覚えておられたのである。「私には分かる」と注文して下さいましたデザートは、たっぷりとチョコレートのかかったアイスクリーム・ケーキで、喉ごしの良い冷たいデザートは、私の小腹を十分に満たしてくれた。非常に大きなケーキで、とても食べきれずにいたところ、博士はチョコレートをたっぷりつけて残りを平らげてくれた。博士も甘いものはお好きなようである。

最終日、空港に向かうまでの残り1~2時間、博士は私をビーチでの日光浴に連れ出して下さった。お宅から2ブロックほど歩けば、そこはもう一面の大西洋である。博士は毎日愛犬の Mickey とここを散歩しておられるとのことである。夏の観光シーズンが過ぎ、人気もなくのんびりとしたビーチに折り畳み椅子を広げ、心地よい日射しに体をさらし、ゆったりとした海を眺めながら、この4日間お腹一杯にため込んだ博士との会話と、今はまだ数センチにも満たないお腹の赤ちゃんのことを思い浮かべた。まだどちらも夢のような漢

然としたものでしかないが、どちらも確実に私の中で育っていき、無事に誕生することを——形になることを——願った。ちょっと欲張りだとは思いますが、どちらも私には大切なものである。どちらかではなく、両者を一緒に心を込めて育てていきたいと思う。子育てとの両立はかなりの時間を必要とするであろうが、少しずつでいい、私の人生の課題として、博士から教えていただいたくさんのことをきちんと形にしていくこと、それが私のできる唯一の博士へのお礼である。ビーチから戻り、借りていた帽子を博士にお返ししようとする、博士は“gift”と言って、もう一度私の頭にポンと、その緑色の野球帽をかぶせて下さった。博士が在職されていた Akron 大学の野球愛好家シニアチームの帽子であった。生涯にわたる博士の趣味を託されたような心境であった。

今改めて Wagner 博士との 4 日間を振り返ると、私がこの濃密な短期間に彼から学んだものはハンドテストの“厳しさと優しさ”であったように思う。博士はこの 4 日間、ハンドテストの有効性を多くの事例から示して下さいましたが、その際繰り返し私に諭されたのは、ハンドテスト使用の strict な面——厳しき——であった。しかし一方で、博士が私をさり気なく気遣って下さったような優しさ、そして、博士が私のあらゆる興味と関心に応えてくれたような懐の広さが、ハンドテストにはある。その簡便さ、手という親しみやすさから、ハンドテストはどちらかというとなり易な検査である。そのため、現在既に日本においても利用されている犯罪・非行臨床や病院臨床、スクール・カウンセリングにおけるアセスメント用具に留まらず、これからは発達障害者施設や老人福祉施設における適応評価、また、脳損傷患者における心理的問題の評価、身体機能障害者やペイン・クリニックにおけるカウンセリングでの心理理解など、幅広い可能性——懐の広さ——をもつ検査である。しかし、この検査の使用に当たっては、

博士が繰り返されたように strict き——厳しき——が不可欠である。正しい実施とスコアリング、そして解釈、これらによって初めてハンドテストはその能力を発揮し、有効な検査バッテリーとしての意味をもつのである。Rorschach 法に比べて気軽に使用できる検査ではあるが、Rorschach 法と同じようにきちんとした訓練が必要なのである。この両者を上手く統合すること、その重要性を私は博士と出会うことで改めて教わった気がする。この“厳しきと優しき”を併せもつハンドテストは、まさに Wagner 博士そのものである。これから私は、ハンドテストの 9 枚の手の絵を見るたびに、博士の力強い大きな手を思い出さずにはいられないであろう。

文 献

- Allison, R.B. (1984) Difficulties diagnosing the multiple personality syndromes in a death penalty case. *International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 32, 102-117.
- Garb, H.N. (1999) Call for a moratorium on the use of the Rorschach Inkblot Test in clinical and forensic settings. *Assessment*, 6, 313-315.
- Kalla, O., Wahlstrom, J., Altonen, J., et al. (2002) Cognitive deficits in patients with first episode psychosis as identified by Exner's schizophrenia index in Finland and Spain. *Rorschachiana*, 25, 175-194.
- 箕浦康子 (1970) テスト紹介—ハンドテスト. 臨床心理学研究, 9, 37-41.
- 中井久夫 (1997) ロールシャッハ・カードの美学と流れ. アリアドネからの糸. みすず書房.
- 岡堂哲雄・矢吹省司 (1976) ロールシャッハ・テスト入門—知覚分析的アプローチ. 日本文化科学社.
- Orne, M.T., Dinges, D.F., & Orne, E.C. (1984) On the differential diagnosis of multiple personality in the forensic context. *The International Journal of Clinical and Experimental Hypnosis*, 32, 118-169.
- Panck, P.E. & Wagner, E.E. (1985) *The use of the Hand Test with older adults*. Springfield, Illinois: Charles C Thomas.
- 佐々木裕子 (1999) 日本におけるハンドテストのカード特性について. 福岡教育大学紀要, 48(4), 215-228.
- Wagner, E.E. (1962) *The Hand Test Manual*:

- Manual for administration, scoring, and interpretation*. Los Angeles: Western Psychological Services. (山上栄子・吉川真理・佐々木裕子訳 (2000) ハンドテスト・マニュアル. 誠信書房)
- Wagner, E.E. & Heise, M.R. (1974) A comparison of Rorschach records of three multiple personalities. *Journal of Personality Assessment*, 38, 308-331.
- Wagner, E.E. & Wagner, F.C. (1981) *The Interpretation of Projective Test Data: Theoretical and practical guidelines*. Springfield, Illinois: Charles C Thomas.
- Wagner, E.E., Allison, R.B., & Wagner, C.F. (1983) Diagnosing multiple personalities with the Rorschach: A confirmation. *Journal of Personality Assessment*, 47, 143-149.
- Wagner, E.E. (1992) Diagnosing MPD with two new Rorschach signs: Are the signs valid or are the MPDs atypical? *Perceptual & Motor Skills*, 75, 462.
- Wagner, E.E. (2001) *The Logical Rorschach: A brief scoring method to screen for psychopathology*. Los Angeles: Western Psychological Services.
- Wood, J.M. & Lilienfeld, S.O. (1999) The Rorschach inkblot test: a case of overstatement? *Assessment*, 6, 341-349.
- Wood, J.M., Nezworski, M.T., Garb, H.N., & Lilienfeld, S.O. (2001) The misperception of psychopathology: problems with the norms of the comprehensive system for the Rorschach. *Clinical Psychology: Science & Practice*, 8, 350-373.
- 吉川真理 (1988) ハンドテスト検査場面に関する実験的研究—指示に加えられた検査定義が反応に及ぼす影響. 心理学研究, 58, 381-387.
- Young, G.R., Wagner, E.E., & Finn, R.F. (1994) A comparison of three Rorschach diagnostic systems and use of the Hand Test for detecting multiple personality disorder in outpatients. *Journal of Personality Assessment*, 62, 485-497.